

食農教育における農村ホームステイの可能性について

北海道農協青年部協議会 会長
全国農協青年組織協議会 理事 齊藤和弘

北海道農協青年部協議会(JA道青協)では、これまで多くの関係機関と連携しながら「食」や「農業」の大切さを伝えるため、全道各地の盟友(青年部員)と共に子供農業体験や学校へ出向く出前授業の開催など、様々な食農教育活動に取り組んできました。そして、食農教育活動の更なる発展や食と農業をより深く理解してもらうことを目指し、平成25年度より、地域の学校教員を対象とした一泊二日の農村ホームステイ事業である「食の大切さを伝えるプロジェクト」を実施してきました。

この事業を始めた契機には、平成17年に成立した「食育基本法」や「栄養教諭制度」で学校における食育の指導体制の拡充が図られてきた一方、多くの学校から「給食の残りが多い」や「好き嫌いが多く困っている」などの声が聞かれるなど、必ずしも順調に食育推進の成果があがっていないことが背景としてありました。このような現状から、JA青年部では、今まで行ってきた食農教育とそれを通じた生産者の思いが本当に子供たちや消費者の方に伝わっているのか?などの疑問が生じました。そこで、子供たちに教える先生と連携し食育を進めていけば、これまで以上の成果があげられるのではないかと判断し、この事業を進めていくこととしました。しかし、農業体験をもつ先生が少なく、学校では教科書を使った食育が中心となっており、生産者の思いがなかなか子供たちに伝わらないといった現実がありました。そこで、まず先生に農業を体験していただき、さらに農家宅にも泊まっていただくことで、生産者の思いを伝えていく農村ホームステイを始めたのです。

平成25年度は、JA道青協役員を中心に4件、26年度は、更に取り組みを広めようと全道12地区で開催しました。27年度は、全道60事例を目標に掲げ取り組んでいるところです。まだまだ多くの課題はありますが、取り組みは徐々に盟友や各方面に広がりを見せており、農村ホームステイに参加された先生からも「農家の思いや願いを伝え食に対する関心と感謝の心を育てていきたい」「一口分の野菜にかかる時間と労力、食べ物との向き合い方を考えさせたい」などの声をいただき、一泊二日という短い時間にもかかわらず、私たちの思いが想像以上に伝わっていることを実感しました。加えて、この先生を対象とした農村ホームステイには、食の大切さを伝えるだけでなく地域のことを話し合ったり、学校や子供たちのことを話し合ったりと、少し前には当たり前だった学校と地域のコミュニケーションの深化という効果もあるような気がします。

自然と対峙しながら暮らす農村の生活は、半世紀前には当たり前のように身近だったはずですが、現代社会においては、「生きること」や「命の尊さ」を感じられる特別な場となってしまったのかもしれない。私たちは、命の糧である食を国民全体で支えていく様な社会の形成に向け、大きな可能性を秘めている農村ホームステイをさらに広げていきたいと思えます。

(さいとう かずひろ)

*北海道農協青年部協議会

ホームページ <http://jayouth-hokkaido.jp/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/ja.doseikyou>